

▶お知らせ 2021年卒向け「会社説明会」を開催します

1月24日（金）

週刊東洋経済プラス | 四季報才

トップ ビジネス 政治・経済 マーケット キャリア・教育 ライフ

ライフ ▶ 「薬害・廃人症候群」を知っていますか？

殺人の原因にもなりうる抗認知症薬の大リスク

厚労省や医師の問題認識はこのままでいいのか

次ページ »

坂口直：医薬経済社編集部 記者／辰濃哲郎：ノンフィクション作家

2020/01/24 5:15

シェア 76

ツイート

一覧

2

コメント

0

印刷

A

A



副作用で最悪の事態を招いた実例がある（写真：Graphs／PIXTA）

医師から処方される薬剤が原因で、生気がなくなったり、落ち着きを失ったり、認知機能が低下したりする高齢者が数十万人に及ぶかもしれないとしたら信じられるだろうか。

これを「薬剤起因性老年症候群」と呼ぶが、高齢者にとって人生総決算の大切な時期に普段の自分を見失うことは、いわば尊厳を奪われるに等しい。注意を要する薬剤を適正に使っていない点では、まさに「薬害・廃人症候群」と呼ぶべきだろう。計3回の短期集中連載の最終回をお届けする。

[第1回 「認知症の数十万人『原因は処方薬』という驚愕」（2020年1月22日配信）](#)

[第2回 「『睡眠薬で高齢者『寝かせきり』病院・施設の闇（2020年1月23日配信）](#)

副作用／有害事象は「殺人」

ちょうど5年前の2015年1月13日付の神戸新聞に、こんな記事が掲載された。社会面の中ほどに載った、見落としてしまいそうなベタ記事の扱いだ。

「夫に殴られ 73歳妻死亡」

兵庫県姫路市内に住む76歳の無職の男性が自宅で妻(73歳)を殴って死なせてしまったという事件だ。記事によると男性は「妻がぶつぶつ言っていたので腹が立って素手で1発殴った」と認めているという。罪名は傷害から傷害致死に切り替えられている。

一見、単なる夫婦喧嘩の延長にも見えるこの事件だが、そんな単純なものではないことが、後にわかる。

厚生労働省所管の独立行政法人である医薬品医療機器総合機構（PMDA）には、全国の医師や製薬会社などから報告のあった医薬品の副作用事例を「症例一覧」として公開している。この症例をたどっていくと、同じ日付の報告事例がある。「副作用／有害事象」の欄に「殺人」とある。「発現日」は、事件のあったのと同じ「2015年1月12日」で、「70歳代」「男性」も一致する。もちろん個人名や地域名も書かれていないので、確実というわけではないが、姫路の事件のことを指していると思われる。

症例報告によると、この男性はアルツハイマー型認知症の患者で、抗認知症薬、降圧剤、糖尿病薬、高尿酸血症治療薬など複数の薬剤を服用している。その中で、殺人という副作用を起こした被疑薬を「ガランタミン臭化水素酸塩／レミニール」に絞り込んでいる。

レミニールとは、日本で使われている4つの抗認知症薬の先発品の1つだ。その添付文書の副作用欄に「激越」「怒り」「攻撃性」などの精神障害が記されている。この男性が妻を殴打したのは、副作用の疑いがあると報告されていた事例だったのだ。



この連載一覧は[こちら](#)

→ 次ページ さらに驚いたことに

[1](#) [2](#) [3](#) [4](#) [5](#) [→](#)

コメント (0)

関連記事



認知症の数十万人「原因は処方薬」という驚愕



睡眠薬で高齢者を「寝かせきり」病院・施設の闇

合法的な薬物依存「デパス」の何とも複雑な事情

注意!認知症の兆候は3つの違和感に表れる

親の死亡保険を得た子が受けた「酷い仕打ち」

「赤信号を平気で渡る老人」への大きな誤解

トピックボード

AD

▶お知らせ 2021年卒向け「会社説明会」を開催します

1月24日（金）

週刊東洋経済プラス | 四季報才

トップ ビジネス 政治・経済 マーケット キャリア・教育 ライフ

ライフ ▶ 「薬害・廃人症候群」を知っていますか?

殺人の原因にもなりうる抗認知症薬の大リスク

厚労省や医師の問題認識はこのままでいいのか

« 前ページ

次ページ »

坂口直：医薬経済社編集部 記者／辰濃哲郎：ノンフィクション作家

2020/01/24 5:15

シェア 79

ツイート

一覧

2

コメント

0

印刷

A

A

さらに驚くことがある。この症例報告には、この男性が過去に経験した副作用が書かれている。事件の2年前の2013年2月16日、レミニールの副作用として「激越」「攻撃性」「脱抑制」を生じたと記録されている。服用開始日はその約1カ月前の2013年1月5日だから、飲み始めてから1カ月で「激越」などの副作用があったということになる。にもかかわらず、原因となったレミニールは中止されることなく処方され続けた。もし、そのとき中止されていれば、この事件は起きなかつた可能性がある。

抗認知症薬は「攻撃性」「せん妄」の副作用

傷害致死事件は極端な事例かもしれないが、抗認知症薬には「激越」「易怒性」などの攻撃性だけでなく、「せん妄」「幻覚」「不眠」のほか、「徘徊」などの精神神経障害の副作用があり、添付文書でも注意が促されている。

医療機関から紹介のあった認知症の疑いのある患者を受け入れている兵庫県立ひょうごこころの医療センター認知症疾患医療センター長の小田陽彦医師も、抗認知症薬の誤った処方があまりに多すぎると感じている医師の一人だ。

2016年11月、高齢の女性が1人で小田氏を訪ねてきた。女性自身の相談ではなく、70歳代の夫についてだった。夫から暴力を受けて別居したが、その夫の暴力が、ある薬剤を服用してからひどくなつたというのだ。

夫は2014年4月に、アルツハイマー病と診断され、抗認知症薬の「アリセプト」が処方された。その頃から、夫は怒りっぽくなつたという。車を運転して事故を起こし、それを機に運転をやめるよう説得したところ、激高した夫に殴られた。夫婦の別居は、このことが原因だったが、小田医師は一連の話からアリセプトによる「易怒性」を疑い、かかりつけの病院に処方をやめるよう求めた。

相談から1ヶ月が過ぎたある日、小田医師のもとに突然、男性が訪ねてきた。先に相談しに来た女性の夫だ。かなりの興奮状態で、「物忘れ」に効く薬剤と思っていたアリセプトを止められたことに立腹している。「服用している薬は感情をたかぶらせる」と説明したが、聞く耳を持たない。

認知症検査のミニメンタルステート（MMSE）を実施すると、30点中23点だった。23点以下は認知症が疑われるが、図に描かれた時計を「電話」、鉛筆を「薬」と回答し、文章もうまく書けない。ほかの症状や検査結果を総合的に判断して「前頭側頭葉変性症」と診断した。この症状にはアリセプトは効かないと説明したが、男性は納得しないまま引き上げた。

しばらくすると、その妻が再びやってきた。夫は薬剤をやめることができたが、その後は一転して穏やかになり、自動車免許も自主返納し、別居も解消した。その報告に来たのだという。

→ 次ページ 問題は精神・神経症状の副作用だけではない

[←](#) [1](#) [2](#) [3](#) [4](#) [5](#) [→](#)

コメント (0)

関連記事

認知症の数十万人「原因は
処方薬」という驚愕

睡眠薬で高齢者を「寝かせ
きり」病院・施設の闇

合法的な薬物依存「デパス」の何とも複雑な事情

親の死亡保険を得た子が受けた「酷い仕打ち」

注意!認知症の兆候は3つの違和感に表れる

「赤信号を平気で渡る老人」への大きな誤解

トピックボード



6年で売上
急成長企業



ランサムウ
一攻撃は進

近年増大…「災害リスク」対策、成

「現役大学生」が語る企業選びの意

DXがもたらす大学教育現場の可

デザイン思考・リテラシー育成講

ライフの人気記事

王室離脱する「ヘンリー王子夫妻」を待つ茨の道

自衛隊で実践されている究極の「片づけ術」とは

「新型肺炎」日本の備えに不安しか募らない理由

37歳高学歴男性が7年婚活で結果が出ないワケ

おっさんと住む元アイドルの揺れ動く「結婚観」

認知症の数十万人「原因は処方薬」という驚愕

連載一覧

▶お知らせ 2021年卒向け「会社説明会」を開催します

1月24日（金）

週刊東洋経済プラス | 四季報才

トップ ビジネス 政治・経済 マーケット キャリア・教育 ライフ

ライフ ▶ 「薬害・廃人症候群」を知っていますか?

殺人の原因にもなりうる抗認知症薬の大リスク

厚労省や医師の問題認識はこのままでいいのか

« 前ページ

次ページ »

坂口直：医薬経済社編集部 記者／辰濃哲郎：ノンフィクション作家

2020/01/24 5:15

シェア 79

ツイート

一覧

2

コメント

0

印刷

A

A

抗認知症薬の問題は、こうした精神・神経症状の副作用を引き起こすだけではない。

2005年と2015年の2度にわたって日本老年医学会の「高齢者の安全な薬物療法ガイドライン」をまとめた同会理事長で、東大大学院医学系研究科老年病学の秋下雅弘教授が指摘するのは抗認知症薬の「消化器症状」の副作用だ。その重要性について、こう話す。

「（副作用で）多いのは食欲低下といった消化器症状。食べらないから虚弱・低栄養になって動けなくなり、寝込みがちになる。認知症がますます進み、悪循環だ」

そのうえで「（患者や家族が）物忘れを訴え受診すると、安易に処方されるケースがある」と疑問を投げ掛ける。そして、「使用は極力、慎重に。まず生活の見直しなどの非薬物的対応を行うべき」と指摘する。

「使用は慎重に。生活の見直しなど薬物以外の対応を」

抗認知症薬は、認知症の中でもアルツハイマー型（アリセプトはレビー小体型認知症も可）にしか効かない。ところが、診断が確定していないのに、あるいはアルツハイマー型ではなく別の認知症であることがわかつているのに処方するケースが少なくないと小田医師は感じている。その場合、効果が期待できないのに副作用だけが出現するので、危険極まりないことになる。

厚生労働省の調査によると、過去5年間（2013～2017年度）で75歳以上に処方された抗認知症薬の販売金額は毎年約1200億円で、ほぼ横ばいが続いている。ただ、この間、2年に1回、診療報酬の改定によって薬価は引き下げられて、1錠あたりの価格は下がっている。高齢者人口の増加という要因もあるが、国内の使用量は増え続けているといえる。

抗認知症薬は本当に効果があるなら、深刻な副作用があったとしても注意しながらも使っていくメリットはある。だが、その効果に疑問符が付けられている。

2018年6月にフランス政府は、抗認知症薬への国費による保険給付の中止を決めた。使用するならば患者は自費で賄わなければならない。フランス保健省のプレスリリースには、有効性や副作用について評価したところ、『治療的価値がない』とある。

フランスの決定は世界で注目されたが、抗認知症薬の保険適用除外に追随する国は今のところ見当たらない。抗認知症薬はアルツハイマー病を起こす原因そのものではなく、記憶力の低下という「認知症状」を抑制する薬剤だ。

日本でも関係学会などはガイドラインなどを通して、抗認知症薬の効果よりも副作用の危険性への注意喚起に舵を切らざるをえなくなっている。だとすると、抗認知症薬はなぜ使われ続けているのか。

その大きな理由の1つが、患者サイドの要請だ。

→ 次ページ 認知症家族が疲弊する最大の要因

[1](#) [2](#) [3](#) [4](#) [5](#) [一覧](#)

コメント (0)

関連記事

[認知症の数十万人「原因は処方薬」という驚愕](#)

[睡眠薬で高齢者を「寝かせきり」病院・施設の闇](#)

[合法的な薬物依存「デパス」の何とも複雑な事情](#)

[親の死亡保険を得た子が受けた「酷い仕打ち」](#)

[注意!認知症の兆候は3つの違和感に表れる](#)

[「赤信号を平気で渡る老人」への大きな誤解](#)

トピックボード



[「株主優待するヒント](#)



[美的センス「パワポ革!](#)

[20代が変化に柔軟なのは若いかい](#)

[ダイキンを悩ます「空調専業ゆえ](#)

[今さら聞けないサイバー攻撃の手口](#)

[ダイキン「20年変わらない」エア:](#)

ライフの人気記事

[王室離脱する「ヘンリー王子夫妻」を待つ茨の道](#)

[自衛隊で実践されている究極の「片づけ術」とは](#)

[「新型肺炎」日本の備えに不安しか募らない理由](#)

[37歳高学歴男性が7年婚活で結果が出ないワケ](#)

[おっさんと住む元アイドルの揺れ動く「結婚觀」](#)

[認知症の数十万人「原因は処方薬」という驚愕](#)

AD

連載一覧

▶お知らせ 2021年卒向け「会社説明会」を開催します

1月24日（金）

週刊東洋経済プラス | 四季報才

トップ ビジネス 政治・経済 マーケット キャリア・教育 ライフ

ライフ ▶ 「薬害・廃人症候群」を知っていますか?

殺人の原因にもなりうる抗認知症薬の大リスク

厚労省や医師の問題認識はこのままでいいのか

« 前ページ

次ページ »

坂口直：医薬経済社編集部 記者／辰濃哲郎：ノンフィクション作家

2020/01/24 5:15

シェア 79

ツイート

一覧

2

コメント

0

印刷

A

A

認知症の中核症状は物忘れだ。暴言や暴力、徘徊、弄便（ろうべん。便を触ったりする行為）などは「行動・心理症状」（BPSD）と呼ばれ、認知症に付随して起きる症状だ。だが、家族にとって、これが疲弊する最大の要因となる。夜中に徘徊されでは家族も眠れない。暴言、暴力も耐えられない。患者本人や家族にとっても、抗認知症薬は一縷（いちる）の望みなのだ。

だが、抗認知症薬の効き目は限定的だ。一方では、自分を見失ってしまうかもしれない重大な副作用が起きる可能性がある。医師は、そのメリットとデメリットを患者や家族にきちんと説明しているのだろうか。日本の場合、安全性情報は医療が握っていて患者にはあまり知らされない。

誰でも知っているガスターでも深刻な副作用

その安全性情報がきちんと患者に伝わっていないといえば、胃腸薬がある。

「日本で代表的な胃腸薬は」と尋ねられれば、おそらく多くの人は「ガスター」と答えるのではないだろうか。このガスターを高齢者に投与した場合、認知機能が低下し、「無気力感」や「せん妄」「錯乱」「意識障害」「うつ状態」を引き起こすおそれがあることを知っている人が、どれだけいるだろうか。

胃酸の分泌を止めるH2受容体拮抗薬（H2ブロッカー）の1つとして1983年に登場し、ピーク時には約900億円を売り上げた定番商品だ。今では市販薬としてドラッグストアでも販売している。

兵庫県立ひょうごこころの医療センターの小田医師は、ガスターによって認知機能低下を招いた患者を何人も経験している。

2018年4月、80歳代女性が家族に連れられて小田医師のもとを訪ねてきた。1年前から「物忘れ」が目立つようになり、MMSE検査をすると、認知



H2ブロッカーには「認知機能低下」の危険性があると日本老年医学会も指摘している（筆者撮影）

症のボーダーラインの24点だった。だが、頭部の画像検査にも問題は見当たらない。

女性が服用している薬剤の履歴を見ると、「ファモチジン」（ガスターの後発品、以下ガスターで表記）を処方されていた。かかりつけ医に処方中止を進言すると、別の胃腸薬に変更してくれた。そ

れから3カ月後、女性のMMSE検査は28点にまで回復した。物忘れの症状は認知症によるものではなく、ガスターの可能性が高いと小田医師は判断している。

それまで精神・神経症状には問題のなかった高齢者が急に認知機能の低下を招いてしまう。その原因が、一般的な胃腸薬だとは、誰が想像するだろう。

日本老年医学会の2015年のガイドラインでは、H2ブロッカーについて「認知機能低下」の危険性があるので、「可能な限り使用を控える」と注意喚起している。

ところが、ガスターの添付文書を見ると、高齢者への投与については「減量するか投与間隔を延長するなど慎重に投与」との記述にとどまっている。副作用欄には「可逆性の錯乱状態」「うつ状態」「意識障害」（ともに頻度不明）などと書かれているものの、学会が注意を促した認知機能低下についての記載は見当たらない。

→ 次ページ 危険な薬剤はこれだけではない

関連記事

[認知症の数十万人「原因は処方薬」という驚愕](#)

[睡眠薬で高齢者を「寝かせきり」病院・施設の闇](#)

[合法的な薬物依存「デパス」の何とも複雑な事情](#)

[親の死亡保険を得た子が受けた「酷い仕打ち」](#)

[注意！認知症の兆候は3つの違和感に表れる](#)

[「赤信号を平気で渡る老人」への大きな誤解](#)

トピックボード



今求められ
し続ける」

[ダイキン「20年変わらない」エア:](#)



公平性だけ
詰まる背景

[「現役大学生」が語る企業選びの意](#)

AD

▶お知らせ 2021年卒向け「会社説明会」を開催します

1月24日（金）

週刊東洋経済プラス | 四季報才

トップ ビジネス 政治・経済 マーケット キャリア・教育 ライフ

ライフ ▶ 「薬害・廃人症候群」を知っていますか?

殺人の原因にもなりうる抗認知症薬の大リスク

厚労省や医師の問題認識はこのままでいいのか

« 前ページ

坂口直：医薬経済社編集部 記者／辰濃哲郎：ノンフィクション作家

2020/01/24 5:15

シェア 79

ツイート

一覧

2

コメント

0

印刷

A

A

本連載で私たちは、ベンゾジアゼピン系薬剤に抗認知症薬、それに胃腸薬のH2ブロッカーを取り上げてきた。高齢者が最も失いたくない認知機能や運動機能の低下、それに過鎮静など、それまでの生活を一変させてしまう副作用の危険性が起きうる薬剤だ。だが、危険な薬剤はこれだけではない。

2017年8月、日本神経学会は、認知症疾患診療ガイドラインを公表した。認知機能の低下を誘発しやすい薬剤を一覧表にまとめている。私たちが取り上げた薬剤以外にも抗精神病薬、抗うつ薬、抗がん剤、抗ウイルス薬、抗菌薬など薬効の下に300種類近い薬剤名が挙げられている。

鎮痛薬としては有名なリリカやインフルエンザに対する抗ウイルス剤であるタミフル、高脂血症薬としていま最も使われているクレストール、泌尿器科の薬剤として売り上げ上位のベシケア、ガスターの次の世代の胃腸薬であるタケプロンやパリエットの名前もある。これらは医療現場で広く使われている一般的な薬剤だ。

高齢者に対する意識の希薄さが根底に

もちろん、これらの薬剤を必要とする患者もいるし、有用性を否定するつもりはない。だが、その前提となるのは、医師の危険性認識だ。いろいろな学会が警告を発しているにもかかわらず、知らない医師が多すぎるというのが、減薬に取り組んでいる専門医らの共通した見解だ。医師が知らなければ、副作用を起こしていることさえ見過ごし、高齢者は不本意な末路をたどって命を落していく。

その医師に適正な使用を促すべき厚労省は長い間、注意喚起を怠ってきた。薬剤の安全性情報の基本ともなる添付文書にさえ危険性を載せないという行政の不作為は、かつて問われた薬害事件と同じ構図であることに気づく。これが連載タイトルに「薬害・廃人症候群」とつけたゆえんもある。

この問題が放置されてきた背景には、いまの医療の高齢者に対する意識の希薄さがあるように思える。もし、同じような問題が青少年に起きていたらどうだろう。医者も厚労省も看過できないはずだ。

「高齢だからボケるのは仕方ない」「もう老い先が短いのだから」と命に見切りをつけてはいないだろうか。

この世に生を授かり、社会の荒波にもまれながらも生き抜いてきた高齢者にとって、晩年の身の処し方は、その生きた証しを遺すための大切な時期のはずだ。その最終章を迎えたときに、廃人同然にさせられては、たまつたものではない。

[1](#) [2](#) [3](#) [4](#) [5](#)

コメント (0)

関連記事

[認知症の数十万人「原因は処方薬」という驚愕](#)

[睡眠薬で高齢者を「寝かせきり」病院・施設の闇](#)

[合法的な薬物依存「デパス」の何とも複雑な事情](#)

[親の死亡保険を得た子が受けた「酷い仕打ち」](#)

[注意！認知症の兆候は3つの違和感に表れる](#)

[「赤信号を平気で渡る老人」への大きな誤解](#)

トピックボード

AD



[デザイン思考
育成講座](#)



[20代が変!
若いから](#)

[ランサムウエアのサイバー攻撃に](#)

[近年増大…「災害リスク」対策、成](#)

[「現役大学生」が語る企業選びの意](#)

[DXがもたらす大学教育現場の可](#)

ライフの人気記事

[王室離脱する「ヘンリー王子夫妻」を待つ茨の道](#)

[自衛隊で実践されている究極の「片づけ術」とは](#)

[「新型肺炎」日本の備えに不安しか募らない理由](#)

[37歳高学歴男性が7年婚活で結果が出ないワケ](#)

[おっさんと住む元アイドルの揺れ動く「結婚観」](#)

[認知症の数十万人「原因は処方薬」という驚愕](#)

連載一覧

トレンドライブラリー

AD